

平成29(2017)年度
埋蔵文化財緊急発掘調査概報

垂 水 遺 跡
高 城 B 遺 跡
吉 志 部 瓦 窯 跡

平成30(2018)年3月

吹田市教育委員会

序

吹田市では、これまでに分布調査や試掘調査などの積み重ねにより、現在150か所を超える埋蔵文化財の包蔵地が確認されています。そして、これら埋蔵文化財包蔵地におきましては、これまでに数多くの発掘調査を実施し、吹田の歴史を知る上で数々の貴重な成果を得てきました。

発掘調査を実施するにあたりましては、本市では、昭和49（1974）年度以来、毎年度国庫補助事業としての調査を行い、その成果を報告書の刊行をはじめ、文化財説明板の設置、博物館での展示などを通じて、市民の皆様にお伝えできるように努めております。

平成29（2017）年度におきましては、国庫補助事業として市内所在の遺跡について3件の発掘調査を、事業者をはじめとする多くの方々のご協力を得て実施しました。本市教育委員会はこれからも文化財の保護行政により一層強く取り組みたいと考えております。市民の皆様におかれましても本市の文化財保護行政に対して、今後ともご理解・ご協力賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成30（2018）年3月

吹田市教育委員会
教育長 原田 勝

例　言

1. 本書は平成29（2017）年度国庫補助事業として実施した、垂水遺跡、高城B遺跡、吉志部瓦窯跡の発掘調査をまとめたものである。
2. 発掘調査地点は次のとおりである。

垂水遺跡	垂水町1丁目749-2、21
高城B遺跡	高城町1362-3
吉志部瓦窯跡	岸部北4丁目106-1
3. 発掘調査の整理作業は吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館で実施し、資料の保管も同所において行っている。
4. 本文の執筆は、第1章・第2章を賀納章雄、第3章を田中充徳、第4章を堀口健二が行い、編集を賀納が行った。
5. 標高はT.P（東京湾標準潮位）を示す。

発掘参加者名簿

調査主体　吹田市教育委員会
調査指導　大阪府教育庁文化財保護課
調査担当　吹田市教育委員会文化財保護課　田中充徳、賀納章雄、堀口健二
調査補助員　花崎晶子、木船安紀子、林裕子

目 次

第1章 平成29(2017)年度埋蔵文化財発掘調査について	1
第2章 垂水遺跡の発掘調査	3
第3章 高城B遺跡の発掘調査	6
第4章 吉志部瓦窯跡の発掘調査	8

挿図目次

第1図 発掘調査地点位置図	2
第2図 垂水遺跡調査地周辺図	3
第3図 調査区平面図	4
第4図 土層断面図	4
第5図 出土遺物実測図	5
第6図 高城B遺跡調査地周辺図	6
第7図 調査区平面図	7
第8図 土層断面図	7
第9図 吉志部瓦窯跡調査地周辺図	9
第10図 吉志部瓦窯跡調査区位置図	9
第11図 土層断面図	11
第12図 調査区平面図	13
第13図 T 3 遺構詳細図	14
第14図 遺構配置図	15
第15図 出土遺物(軒丸瓦)	16
第16図 出土遺物(丸瓦 1)	18
第17図 出土遺物(丸瓦 2)	19
第18図 出土遺物(丸瓦 3)	20
第19図 出土遺物(平瓦 1)	21
第20図 出土遺物(平瓦 2)	22
第21図 出土遺物(平瓦 3)	23
第22図 出土遺物(平瓦 4)	24
第23図 出土遺物(埠)	25

図版目次

図版1	垂水遺跡1	26
図版2	垂水遺跡2	27
図版3	高城B遺跡	28
図版4	吉志部瓦窯跡1	29
図版5	吉志部瓦窯跡2	30
図版6	吉志部瓦窯跡3	31
図版7	吉志部瓦窯跡4	32
図版8	吉志部瓦窯跡5	33
図版9	吉志部瓦窯跡6	34
図版10	吉志部瓦窯跡7	35
図版11	吉志部瓦窯跡8	36
図版12	吉志部瓦窯跡9	37
図版13	吉志部瓦窯跡10	38
図版14	吉志部瓦窯跡11	39
図版15	吉志部瓦窯跡12	40
図版16	吉志部瓦窯跡13	41
図版17	吉志部瓦窯跡14	42
図版18	吉志部瓦窯跡15	43
図版19	吉志部瓦窯跡16	44
図版20	吉志部瓦窯跡17	45
図版21	吉志部瓦窯跡18	46
図版22	吉志部瓦窯跡19	47

第1章 平成29(2017)年度埋蔵文化財発掘調査について

平成29(2017)年度は、垂水遺跡、高城B遺跡、吉志部瓦窯跡の3遺跡を対象に3件の発掘調査を実施した。

垂水遺跡は、円山町・垂水町1丁目・2丁目に展開する旧石器時代から中世にかけての遺跡である。垂水遺跡は、昭和初期に千里丘陵上における宅地開発に際して弥生土器が出土したことにより発見された。昭和48年には本市及び関西大学が発掘調査を実施し、遺跡内に所在する垂水神社境内地の標高54m付近において竪穴式建物跡、掘立柱建物跡等を確認し、弥生時代の高地性集落として知られることになった。

現在、遺跡の範囲は丘陵上だけでなく、丘陵部から南面する平野部においても広がり、また、遺構・遺物も弥生時代ばかりではなく、旧石器時代からの幅広い時期の資料が確認されている。近年の発掘調査では、丘陵直下の平地部において、4世紀のものとみられる熔解途中の銅鏡片が出土し、古墳時代のやや特異ともいえる資料が得られている。

今回の発掘調査は、この銅鏡片が出土した地点から西方約40mの、ちょうど丘陵部から平地部にかけての地形的変換点付近にあたる垂水町1丁目749-2、-21において確認調査として実施したものである。

高城B遺跡は、高城町・高浜町を中心に一部昭和町・朝日町にまで広がる縄文時代から中世にかけての遺跡である。高城B遺跡が展開する付近は標高が約5～6mで、吹田市内の平野部においては微高地となり、近隣には高城遺跡、高浜遺跡等の遺跡が同じく微高地上に展開している。

平成7年度・8年度に実施した都市計画道路敷設に伴う発掘調査では、古墳時代の井戸跡や、大溝に囲われたと考えられる平安時代の掘立柱建物跡、そして中世の土坑群等が確認されている。高城B遺跡では、比較的締まった粘土層が地山層として広く認められるが、遺跡の南側においては、神崎川の影響を受けたとみられる砂層が遺構ベース面として確認される箇所もある。今回の発掘調査は、高城B遺跡の南東端付近にあたる高城町1362-3において確認調査として実施したものである。

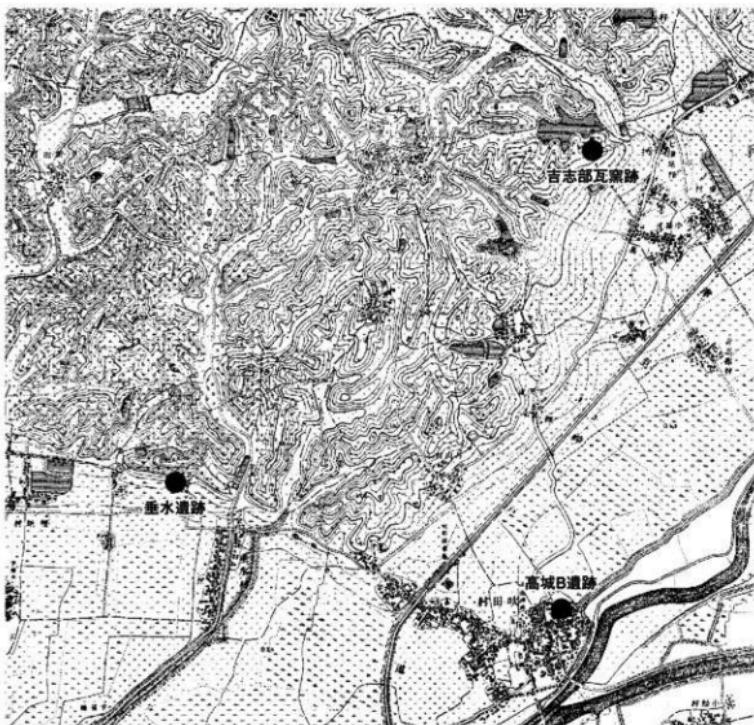
吉志部瓦窯跡は、岸部北4丁目所在の紫金山公園及び吉志部神社境内地を中心に広がる、平安京造営初期に平安宮への供給瓦を生産した瓦窯跡である。昭和前期には吉志部神社付近において綠釉瓦や瓦当の出土により瓦窯の存在が指摘され、また平安宮出土瓦との類似から平安宮へと瓦を供給していた可能性も指摘されていた。本格的な発掘調査については、昭和43(1968)年に大阪府教育委員会によってなされ、その後、公園整備等に伴い本市教育委員会でも調査を行い、これまでに発掘調査によって窯4基、平窯12基が確認され、他に大阪府によるボーリング調査によって平窯と考えられる窯3基の存在が確認されている。

窯は、千里丘陵裾野の南向きの傾斜面上に築かれているが、窯下方においては、大阪府営住宅建設や都市計画道路敷設等に伴う発掘調査で、回転台跡や建物跡、粘土採掘坑が検出されて

おり、粘土採掘から焼成までの一連の瓦製作が一帯でなされていたことが確認されている。

吉志部瓦窯跡の中心となる公園・神社境内地一帯については、昭和46（1971）年に国史跡に指定されており、それ以降の発掘調査で確認された工房跡の一部は、大阪府史跡に指定されている。

今回の発掘調査は、ボーリング調査による確認のみで、3基の窯があるとみられるものの、その実態は明らかでない史跡の東側部分（岸部北4丁目106-1）において、窯体の位置や遺存状態の確認を行い、今後の保存活用を図っていくことを目的に実施したものである。調査の実施にあたっては、史跡現状変更申請を行い、許可を得た上で実施した。



第1図 発掘調査地点位置図 [1 : 30,000 / 明治18年測量図]

第2章 垂水遺跡の発掘調査

1 調査の経過

今回の発掘調査は、住宅の建築工事に伴い実施したもので、遺構・遺物包含の有無を確認することを目的に、平成29年(2017年)年5月30日に調査トレンチを1か所(約5m²)設定し、重機を用いて実施した。

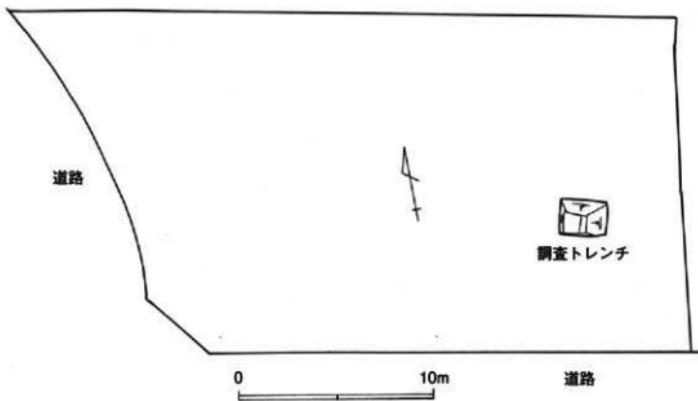
2 調査の成果

調査トレンチを掘削したところ、現代盛土層(第1層)以下、灰色砂質土と淡灰色砂の混合層(第2層)、淡灰色砂(細礫混じる)層(第3層)、黒灰色砂質土層(第4層)の堆積が認められた。

第4層については、部分的に約40cmの深さまで掘削を行ったが、土層底面を確認することはできず、少なくとも40cm以上の層厚をもって堆積するものと考えられ、第4層自体が溝や落ち込み跡等の堆積土である可能性が考えられる。

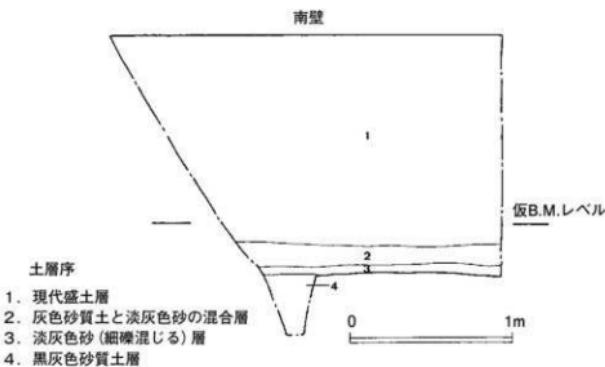


第2図 垂水遺跡調査地周辺図 [1 : 2,500]



○ マンホール (仮B.M.)

第3図 調査区平面図



第4図 土層断面図

遺物については、第3層と第4層において弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土した。遺物は、主に弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものであったが、第3層においては須恵器片も少量含まれていた。

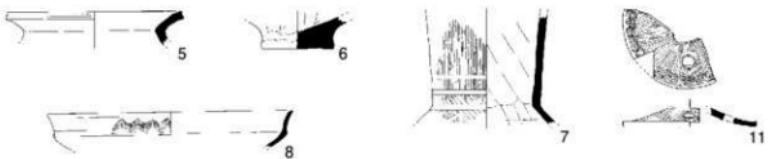
図化できた遺物をみると、1～4は、淡灰色砂（細砾混じる）層（第3層）出土のものである。1は弥生土器壺の底部である。2・3古墳時代前期のもので、2は土師器高杯の杯部であり、内外面とも密にミガキ調整が施されている。3は土師器壺の口縁部である。4は弥生土器か土師器かの判別は難しいが、壺の体部と考えられる破片で、ミガキ調整がなされた外面に線刻が施されている。

5～11は、黒灰色砂質土層（第4層）出土のものである。5・6は弥生時代後期の弥生土器壺の口縁部と底部である。7・8は弥生時代後期から古墳時代初頭頃のものと考えられるものである。7は長頸壺の頸部で、外面にミガキ調整が施されている。8は壺もしくは高杯杯部の口縁部で、波状文が施されている。9・10は古墳時代初頭頃のものと考えられる二重口縁壺の口縁部である。両者ともその外面に粘土紐を貼り付けられて装飾が施されている。11は、古墳時代前期の高杯の脚裾部である。外面は密なミガキ調整がなされた後、波状文が施されている。

以上のように、今回の調査では、主に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物を含む遺物包含層を確認することができた。おそらく、この遺物包含層については概ね古墳時代前期に形成されたものであろうと考えられる。今回の調査では、調査範囲が限られていたことから、明確な遺構については確認できなかったが、前述したように、遺物包含層のうち第4層が遺構の堆積土である可能性も考えられ、当調査地内において遺構が展開している可能性は高いと考えられる。



(淡灰色砂層出土)



0 10cm

(黒灰色砂質土層出土)

第5図 出土遺物実測図

第3章 高城B遺跡の発掘調査

1 調査の経過

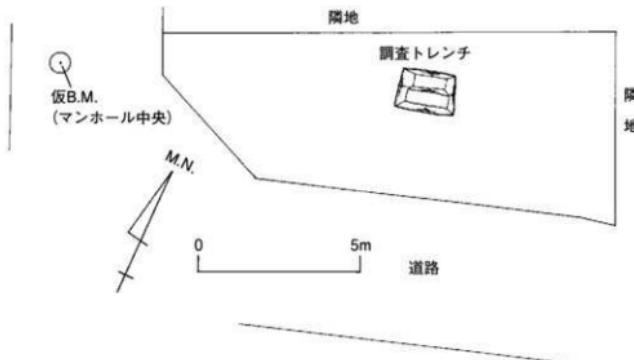
今回の発掘調査は、高城B遺跡にあたることから、住宅の建築工事に伴い実施したもので、平成29（2017）年9月4日に、遺構・遺物の包含の有無を確認することを目的として、調査トレンチ1か所（約2m²）を設定して行った。

2 調査の成果

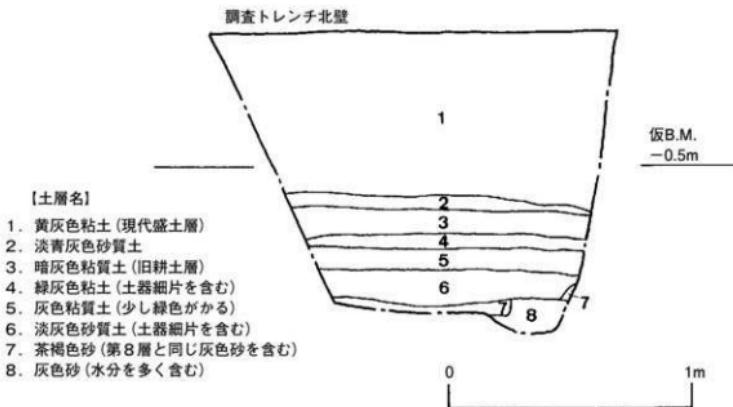
今回の調査トレンチでは、地表面から約1.25mまで掘削を行い土層の堆積状況を確認した。深さ約70cmの現代盛土層等（第1・2層）以下、旧耕土層と考えられる暗灰色粘質土層（第3層）、緑灰色粘土層（第4層）と続き、灰色の粘質土・砂質土（第5・6層）が水平に、さらにその下には茶褐色・灰色の砂層（第7・8層）が堆積していた。今回の調査で検出した土層では明確な遺構は検出されなかつたが、第4層と第6層から土師器の細片がそれぞれ1点ずつ出土した。第4層出土の土師器については磨滅が著しく器形は不明だが、第6層出土の土師器については甕などの器の口縁部と考えられる。これらの土器はいずれも細片であり、当調査地の北側では高城B遺跡が広がっていることから、これら周辺地域から流れ込んで来たものと考えられる。



第6図 高城B遺跡調査地周辺図 [1 : 2,500]



第7図 調査区平面図



第8図 土層断面図

第4章 吉志部瓦窯跡の発掘調査

(1) 調査の経緯(第9図)

吉志部瓦窯跡は、千里丘陵の南東部、岸部北4丁目の紫金山公園および吉志部神社境内地を中心とし、古くから吉志部神社付近においては古代瓦が出土することが知られており、昭和前期には瓦窯の存在と平安宮との関連が指摘されている。その後、昭和38(1963)年になり、地元郷土史家による踏査によって6基の瓦窯の存在が確認された(鍋島1964)。

本格的な発掘調査は、昭和43(1968)年に大阪府教育委員会によって初めて実施され、併せてボーリングによる分布調査も行われ、吉志部神社を中心にみて、西側部分において平窯6基、東側部分において平窯3基、神社北西の丘陵斜面上方で窯窓4基が確認された(大阪府教育委員会1968)。

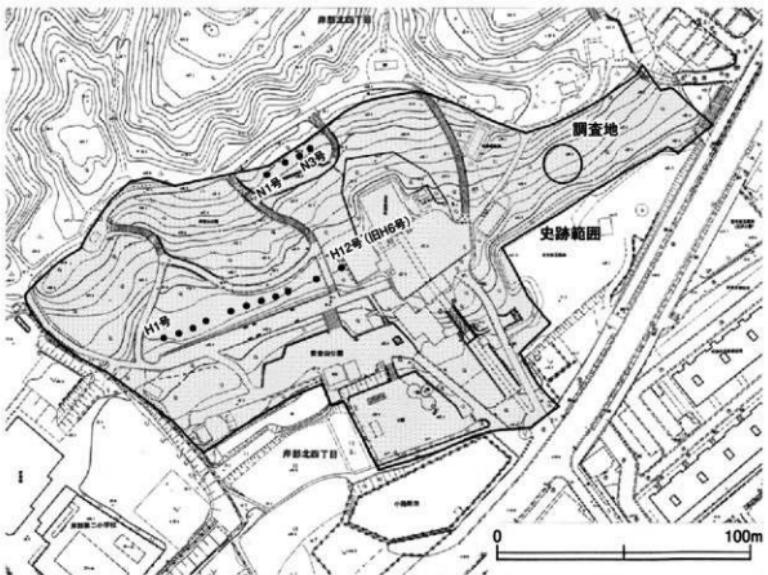
大阪府による発掘調査は、吉志部神社の西半部で行われ、H1号窯とH6号窯(現H12号窯)の平窯2基、N1号窯とN3号窯の窯窓2基、それに平窯群の背後を区画する排水溝が検出された。

H1号窯は半地下式有畔式平窯で、全長3.9m、焼成室は幅2.2m、奥行1.2mの長方形で、床には半切平瓦と粘土を交互に積み上げた6条の畔、燃焼室との間に瓦と粘土を積み上げた隔壁、その下端には8条の通炎孔が穿たれていた。また、H6号窯は西半部のみの確認であったが、構造はH1号窯とはほぼ同一で、平窯は規格性の高いことが確認された。また焚口の西側に接して、平面逆三角形の簡易な窯状遺構が検出された。これについては、H6号窯と同時に使用され、綠釉陶器の一次焼成に使用された可能性が指摘されている。

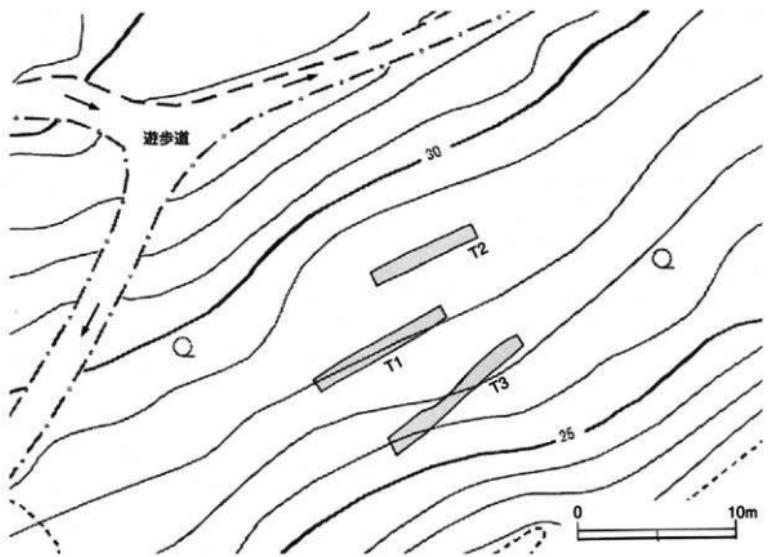
N1号窯は全長5.2～5.7m、幅1.3mの半地下式無段窯窯で、焼成部床面に平瓦が敷き詰められ、綠釉の点滴が認められ、綠釉陶器の焼成が行われていたことが確認された。また、N3号窯については、焼土部分を残すのみであった。

この発掘調査により、一部の窯の構造を確認するとともに、出土瓦から吉志部瓦窯跡は平安宮造営時に瓦を供給した窯跡であることが確認され、その歴史的重要性から昭和46(1971)年に国史跡に指定され、史跡公園として整備されることになった。そして公園整備時および本市教育委員会が平成19(2007)年度に実施した公園再整備に伴う確認調査によって、神社西側においては平安宮供給瓦の生産窯(平窯)がさらに6基確認されている(吹田市教育委員会2012)。

このように、これまでに平窯は神社西側で12基、東側で3基確認されており、それらは概ね標高26～27m付近の丘陵南向き斜面上に確認されている。また窯窓については平窯より上方の標高35～37m付近に築かれている。これらの窯は丘陵斜面上に構築されているが、窯の南側下方の標高21～23m付近になると傾斜は緩やかとなり、平坦地面上もみられる。そして、こうした傾斜地面から平坦地面上においては、これまで大阪府営住宅の建設や、公園整備、道路敷設等に伴う発掘調査によって、粘土採掘坑、建物跡、回転台跡などの遺構が検出されており、吉志部瓦窯跡一帯のまとまった範囲の中で、粘土採掘から焼成までの一連の瓦作りが行わ



第9図 吉志部瓦窯跡調査地周辺図



第10図 吉志部瓦窯跡調査区位置図

れていたことが判明している。

さて、このように吉志部瓦窯跡における瓦生産の様相は近年分かりつつあるが、神社東側部分における平窯については、大阪府のボーリング調査で窯体の存在は確認されているものの、その実態は明らかでない。このことから、今回の発掘調査は、窯体の残存状態の確認を行い、今後の保存活用を図っていくことを目的に実施したものである。発掘調査は平成30（2018）年1月11日から1月25日にかけて、樹木を伐採しないで掘削可能な範囲を選び、調査トレンチ3か所（約27.3m²）を設定し、人力掘削により実施した（第10図）。

（2）調査の成果

1) 基本層序（第11図）

調査地の標高は約26～28m地点となる。南側平坦面との比高差は約5～7mである。調査区内では大きく4層の層序区分が可能であり、以下に概要を記す。

第1層：暗赤灰色～黒褐色腐植土。層厚10～20cmを測る。現代の表土である。

第2層：褐灰色腐植質シルト。層厚30cmを測る。古代瓦を含む。

第3層：淡黄色シルト質粘土（やや縮まる）。層厚55～75cmを測る。古代瓦を含む。遺構面を構成する。

第4層：明青灰色粘土（よく縮まる）。未完掘のため層厚は不明である。地山層である。

2) 検出遺構（第12図）

【T 1】

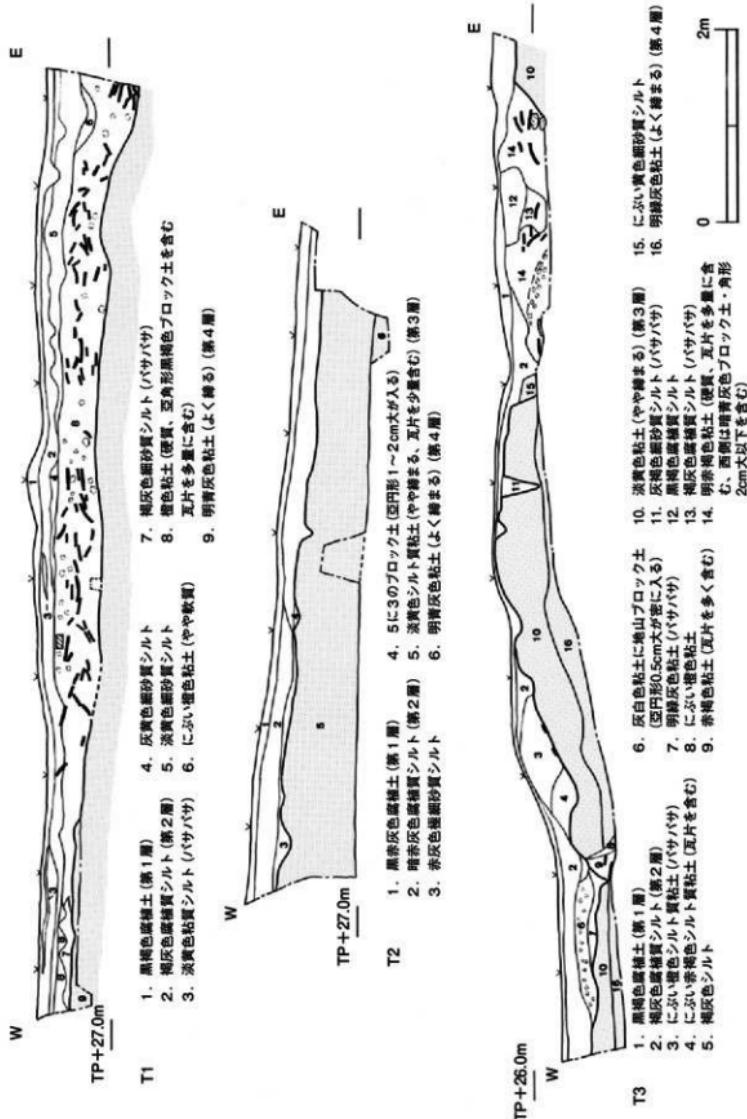
第3層（淡黄色シルト質粘土）をベース層として、平面形「L」字形に走向する溝と考えられる落ち込み跡と、ピット1基を検出した。

【溝 S D 1】 東西6.4m以上、南北60cm以上、深さは最深部で60cmを測り、調査トレンチ外の西側と南側へと展開する。埋土は被熱で硬質となった橙色粘土が堆積していたが、ほぼ単層であることから一気に埋没したと見られる。埋土内部から古代瓦が多量に出土したほか、窯壁片、完形の埠が出土した。

【ピット P 2】 東西22cm×南北18～30cm、深さ21cmを測る。平面形・断面形ともに不定形で、埋土は表土に類似した黒褐色腐植土であった。遺物は出土せず、形状から植物の根痕の可能性が考えられる。

【T 2】

遺構や焼土層等は検出されなかった。第2～3層中からは瓦片が出土した。なお第3層（ベース層）内からも瓦が出土していることから、第3層は、窯を構築した際の整地層の可能性が考えられる。



第11図 土層断面図

【T 3】

第3層をベース層として、調査トレンチ東側で瓦窯（平窯）を検出した。また第4層（地山）をベース層にして、調査トレンチ西側で瓦窯に関わると思われる遺構を検出した。

【窯 S Y 3】（第13図） 窯体の規模は検出部分で東西（幅）2.08m×南北（奥行）1.62m以上を測り、掘り方を含めると東西2.75mを測る。深さは遺構面から45cm地点まで掘り下げたが、遺構保護の観点から埋土の完掘はしていない。主軸方位（磁北）はN 7°Wである。検出部分は、側壁部分および燃焼室と焼成室を隔てる隔壁部分である。側壁と隔壁はともに平瓦の凸面を上向きにして、スサの入った粘土と交互に積み重ねていた。埋土内から多量の瓦が出土した。

【不明遺構 S X 4】（第13図） 東西0.5～1.45m×南北80cm以上の不定形で、断面観察によると、赤褐色粘土が高さ30cmの土手状を呈して堆積する。遺構保護のため完掘はしていない。盛土内からは瓦がまとまって出土した。瓦の中には、スサの入った粘土が付着したものも見られた。瓦は、盛土上部では規則性のない出土状態であったが、地山面まで掘り下げたところで平瓦が直線的に並べられたような状態で出土した。平瓦列の方位はN87°Wである。

3) 遺物（第15～23図）

出土遺物はコンテナ10箱分を数えた。遺物の内訳は古代瓦がほとんどであり、他に壇、窯壁片の他、中世の土師器羽釜または鍋の脚部、常滑焼と思われる陶器の小片なども若干出土した。

出土瓦は大多数が平瓦であった。出土瓦のうち、平瓦の凸面に残る縄目叩き痕の単位は、3～4本/cmが大半であったが、一部に1本/cmの粗い単位や、10本/cmの細かい単位が見られた。またスサの入る粘土が付着した平瓦が多く見られた。丸瓦の出土は、T 1 S D 1 でやや多い傾向が見られた。軒瓦については、軒丸瓦の瓦当片が3点出土した。以下に、主だった出土遺物の概要を記す。

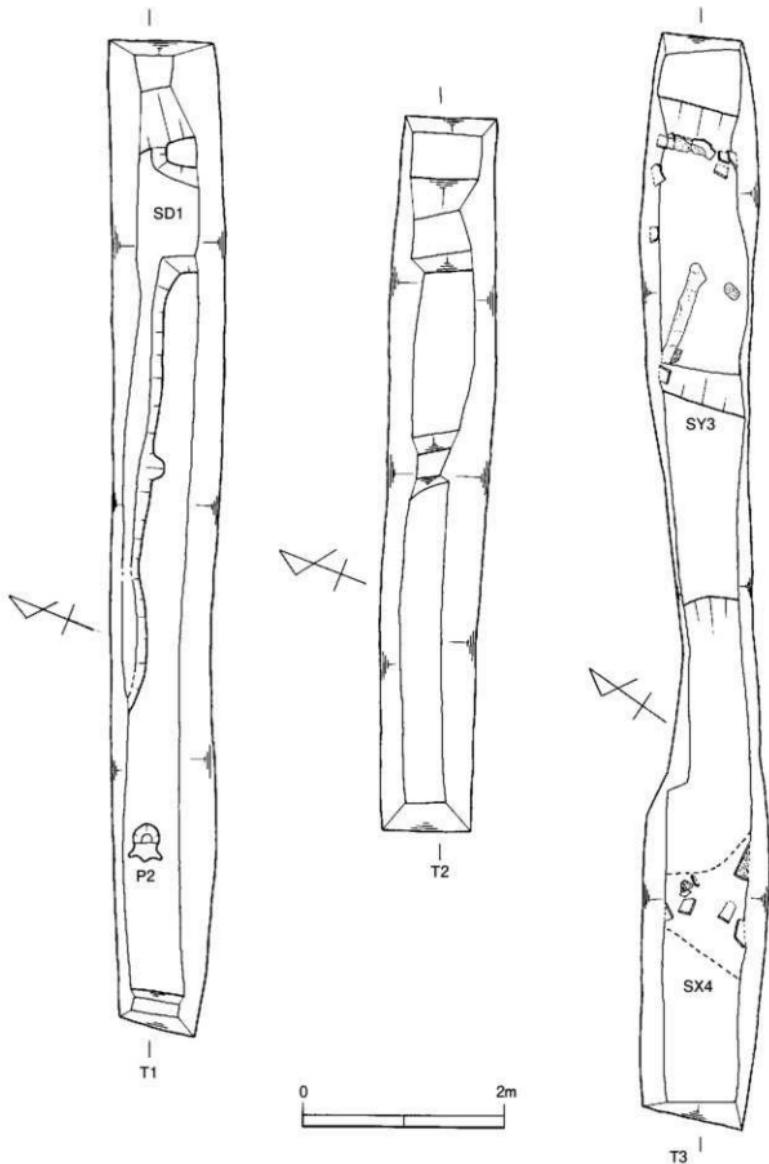
1～3は軒丸瓦の瓦当部である。1はT 1 S D 1 の出土である。瓦当紋様は蓮華紋である。外区厚さ22cm、内区厚さ1.7cmを測る。内外面、胎土ともに黄灰色を呈する。

2はT 1 S D 1 出土である。外区と珠紋部分が残る。外区厚さ2.5cm、内区厚さ1.8cmを測る。内面・胎土はにぶい黄橙色、外面は灰黄色を呈する。

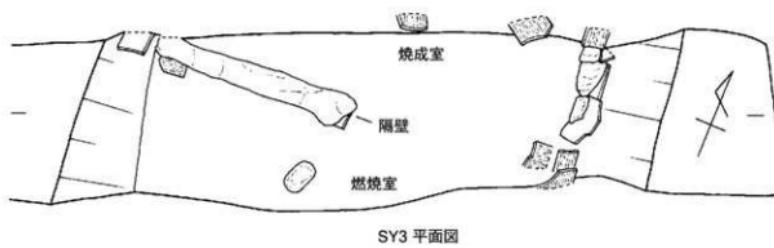
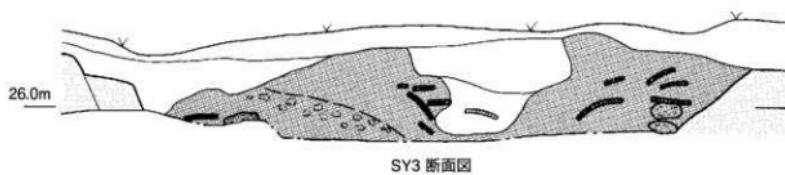
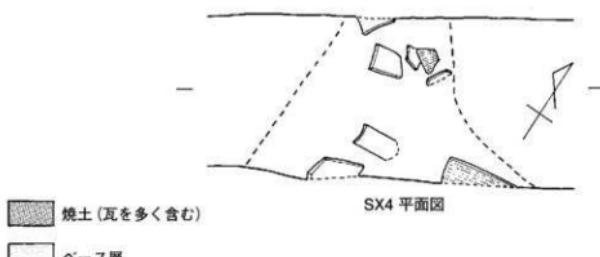
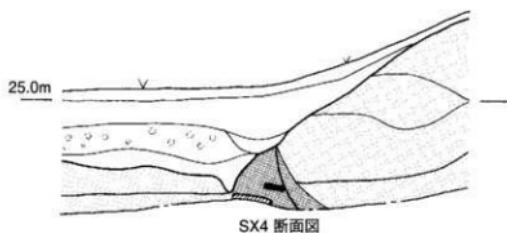
3はT 3 東半部の排土から出土し正確な土層位置は不明であるが、S Y 3 の窯埋土に含まれていた可能性がある。外区と珠紋部分が残り、丸瓦との接合部が残る。外区厚さ2.2cm、内区厚さ1.0cmを測る。外面・胎土は浅黄色、内面は灰色を呈する。

4～6は丸瓦である。ともにT 1 S D 1 の出土である。いずれも外面は縄目叩き痕をナデ消し、内面に布目痕が残る。4は全長37.0cm、残存幅15.1cm、高さ6.4cm（推定）、厚さ1.6cmを測る。外面・内面・胎土ともに黒褐色～橙色を呈する。縄目痕は丁寧にナデ消しているため、縄目の本数は不明である。

5は残存長32.6cm、幅15.7cm、高さ7.9cm、厚さ1.8cmを測る。外面・内面・胎土ともに暗灰色を呈する。外面の縄目叩き痕は4本/cmである。

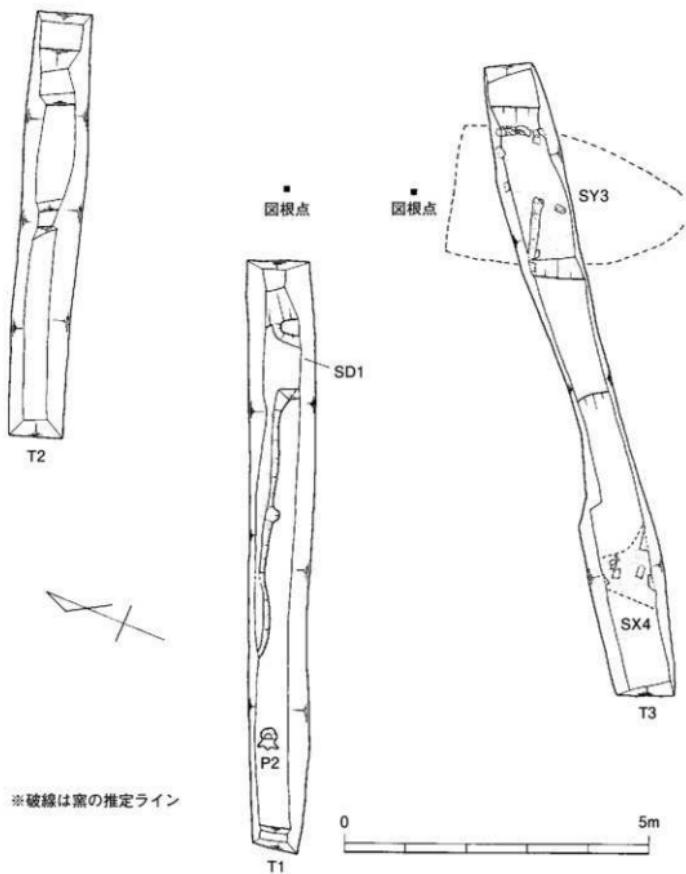


第12図 調査区平面図

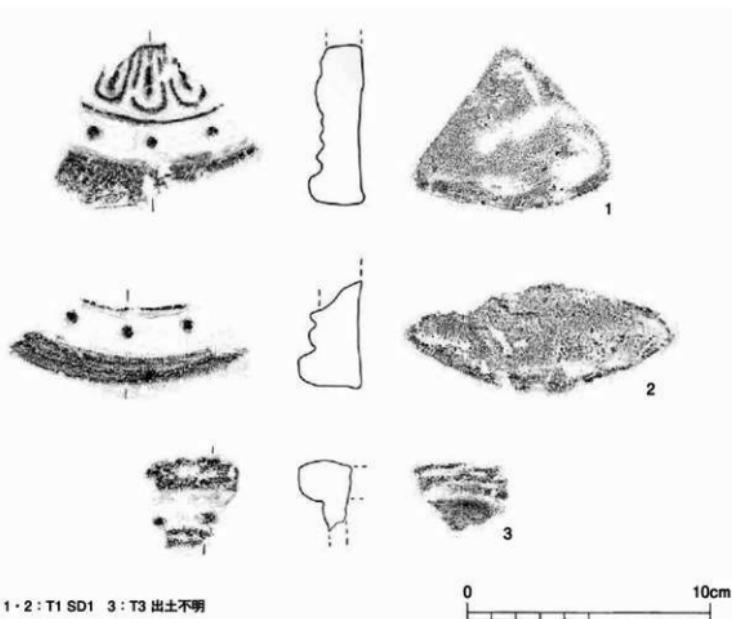


0 1m 2m

第13図 T3遺構詳細図



第14図 遺構配置図



第15図 出土遺物(軒丸瓦)

6は残存長31.7cm、幅16.1cm、高さ7.4cm、厚さ1.6cmを測る。外面は浅黄橙色、内面はにぶい黄橙色、胎土は灰白色を呈する。外面の縄目叩き痕は4本/cmである。

7～17は平瓦である。いずれも凹面に布目痕、凸面に縄目叩き痕が残る。7はT1黄灰色土の出土である。全長35.2cm、狭端部幅21.2cm、広端部残存幅15.8cm、厚さ2.0cmを測る。凸面は灰オリーブ色、凹面・胎土は暗灰黄色を呈する。凹面に布目痕、凸面に縄目叩き痕が残る。縄目痕は3本/cmである。

8はT3SY3からの出土である。残存長12.5cm、残存幅12.7cm、厚さ2.0cmを測る。内面・外面・胎土は灰色を呈する。凹面に布目痕、凸面に縄目叩き痕が残る。縄目痕は5本/cmである。なお凸面にスサの入った粘土が付着し、粘土上面にも布目痕が残る。粘土を含めた厚さは6.5cmを測る。窯の側壁または隔壁に使用されていたと思われる。

9はT1黄褐色土からの出土である。全長34.6cm、残存幅13.0cm、厚さ1.8cmを測る。凹面は浅黄色、凸面は黄灰色、胎土は灰白色を呈する。縄目痕は3本/cmである。

10～15はT1SD1からの出土である。10は残存長14.0cm、残存幅16.7cm、厚さ2.5cmを測る。凹面・凸面・胎土ともに灰白色を呈する。縄目痕は6本/cmである。

11は残存長18.0cm、残存幅21.9cm、厚さ2.5cmを測る。凹面は黒色、凸面・胎土は黄灰色を呈

する。縄目痕は3本/cmである。

12は残存長19.1cm、残存幅14.5cm、厚さ2.2cmを測る。凹面は黒色、凸面はにぶい黄色、胎土は暗灰黄色を呈する。縄目痕は1本/cmである。

13は残存長15.8cm、残存幅13.0cm、厚さ1.7cmを測る。凹面・凸面・胎土ともに灰色を呈する。縄目痕は5本/cmである。

14は残存長19.8cm、残存幅12.0cm、厚さ2.0cmを測る。凹面・凸面・胎土ともに灰白色を呈する。縄目痕は4本/cmである。

15は残存長17.7cm、残存幅11.0cm、厚さ2.7cmを測る。凹面は灰色、凸面・胎土は灰白色を呈する。縄目痕は3本/cmである。

16・17はT 3 S Y 3からの出土である。16は残存長28.8cm、残存幅16.8cm、厚さ2.0cmを測る。凹面・凸面はにぶい黄橙色、胎土は灰白色を呈する。縄目痕は4/cmである。

17は全長31.2cm、幅16.2cm、厚さ2.0cmを測る。凹面・凸面・胎土は灰白色を呈する。凸部の一部に粘土が付着する。縄目痕は10本/cmである。

18は埠である。T 1 S D 1北壁断面からの出土である。ほぼ完形で直方体を呈し、全長31.5cm、幅14.2cm、厚さ5.2cmを測る。外面・内面・胎土は黄灰色を呈する。各面に糸切痕が顕著に残り、一部に指押え痕が残る。

(3)まとめ

窯跡に関わる遺構は、T 1で溝と考えられる落ち込み跡、T 3で窯体と、窯に関わると見られる不明遺構を検出した。

T 1で検出したS D 1は、窯を丘陵上方からの土砂や雨水の流入を防ぐ目的で掘削された、排水溝である可能性が考えられる。ただし用途に関しては、なお検討の余地がある。

T 3で検出したS Y 3は幅約21mで、既往調査で確認されたH 1号窯の幅とほぼ同規模である。なお窯体の下方には作業場となる前庭部や灰原が想定されるが、その箇所は現状でも蹄り場状の平坦地となっており、今後の調査に期待したい。

S X 4は未完掘のため用途は不明であるが、窯体、あるいは窯を保護するための排水溝などの可能性が考えられる。

【参考文献】

大阪府教育委員会1968 『岸部瓦窯跡発掘調査概報』

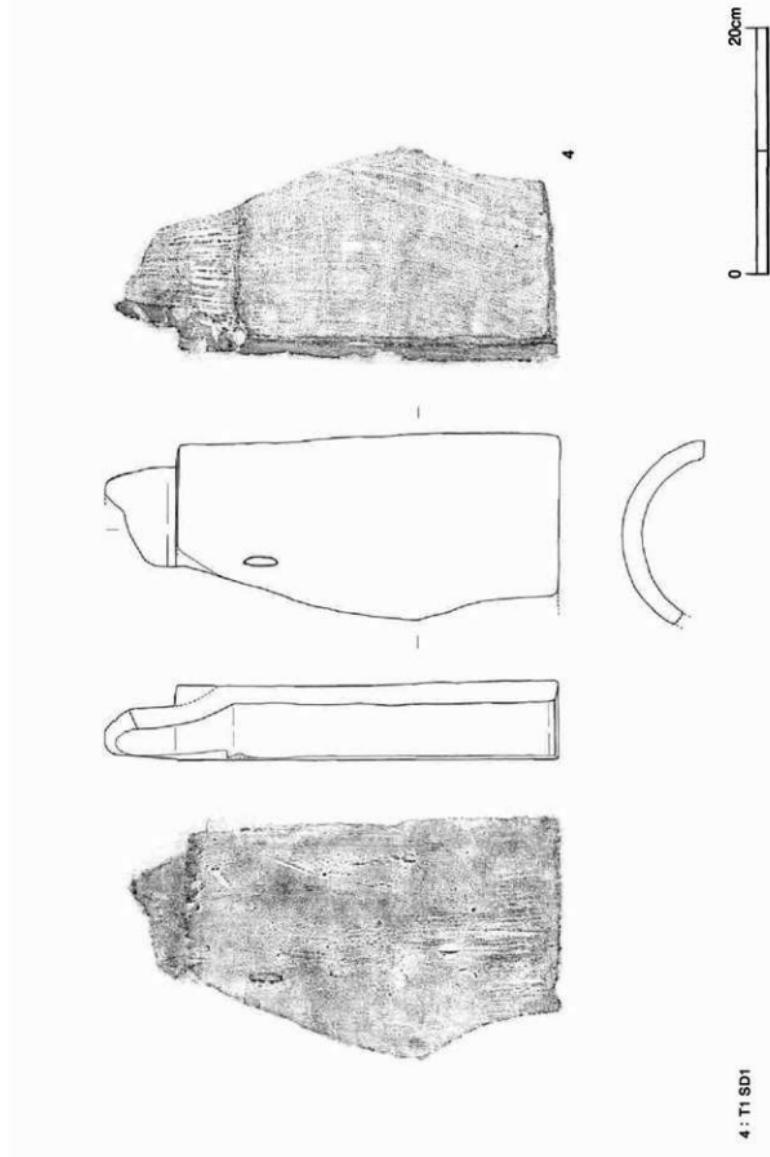
吹田市史編さん委員会1981 『吹田市史』第8巻 吹田市

吹田市都市整備部・吹田市教育委員会1998 『吉志部瓦窯跡(工房跡)』

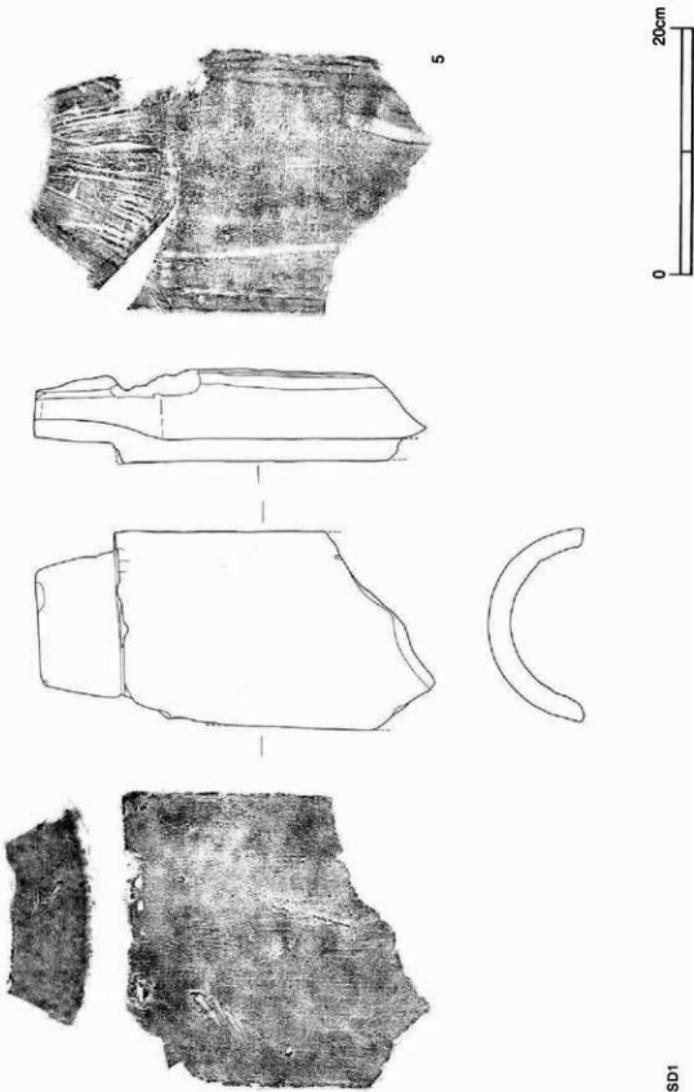
吹田市教育委員会2012 『吉志部瓦窯跡—出土瓦整理報告書—』

鍋島敏也1964 「吉志部瓦窯址発見の瓦」『古代学研究』第38号 古代学研究会

第16圖 出土遺物(尤瓦1)



第17図 出土遺物(丸瓦2)

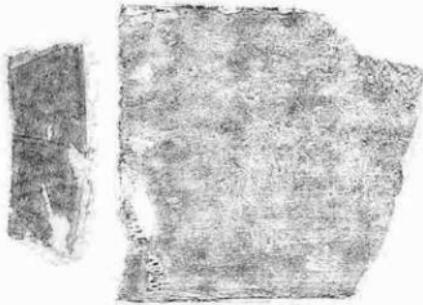
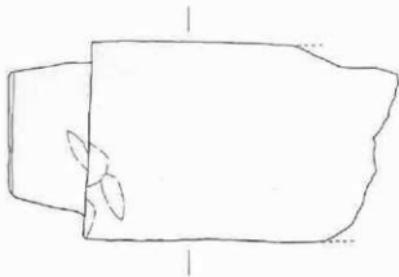


5 : T1 SD1

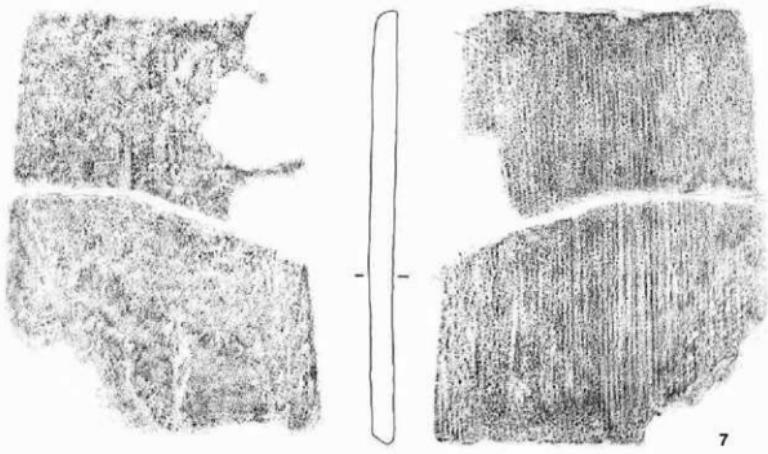
第18図 出土遺物(丸瓦3)



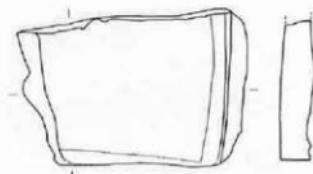
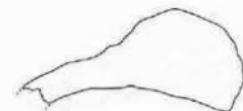
6



6 : T1 Sd1



7



8

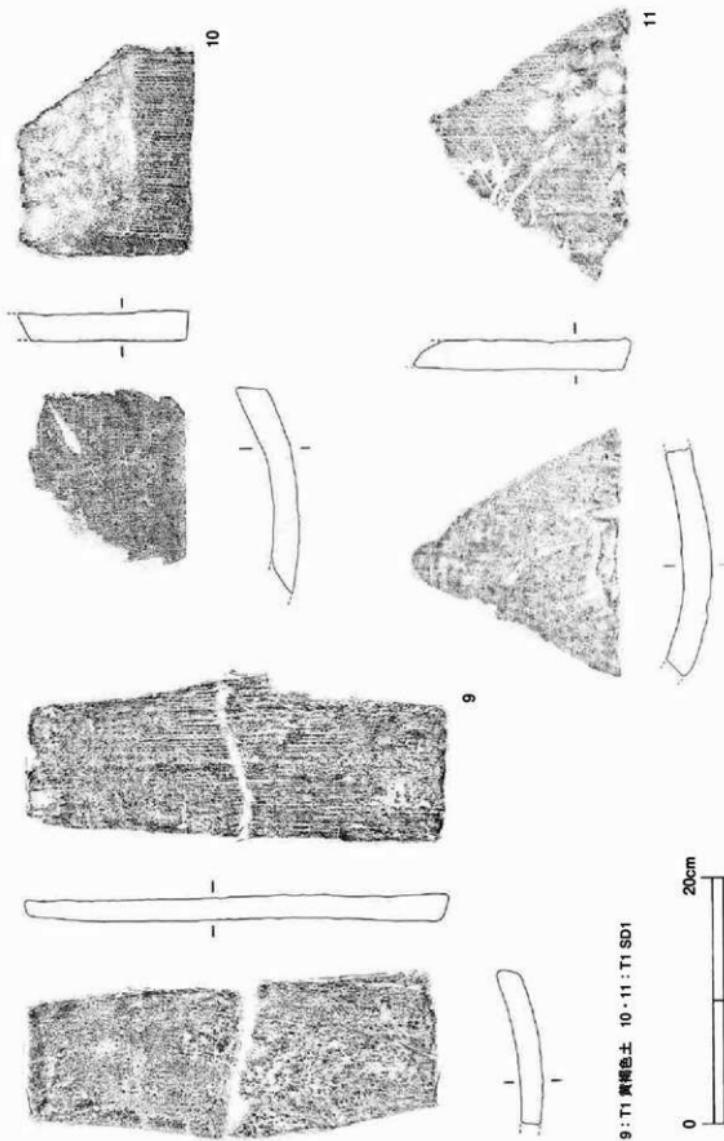


7 : T1 黄褐色土 8 : T3 SY3



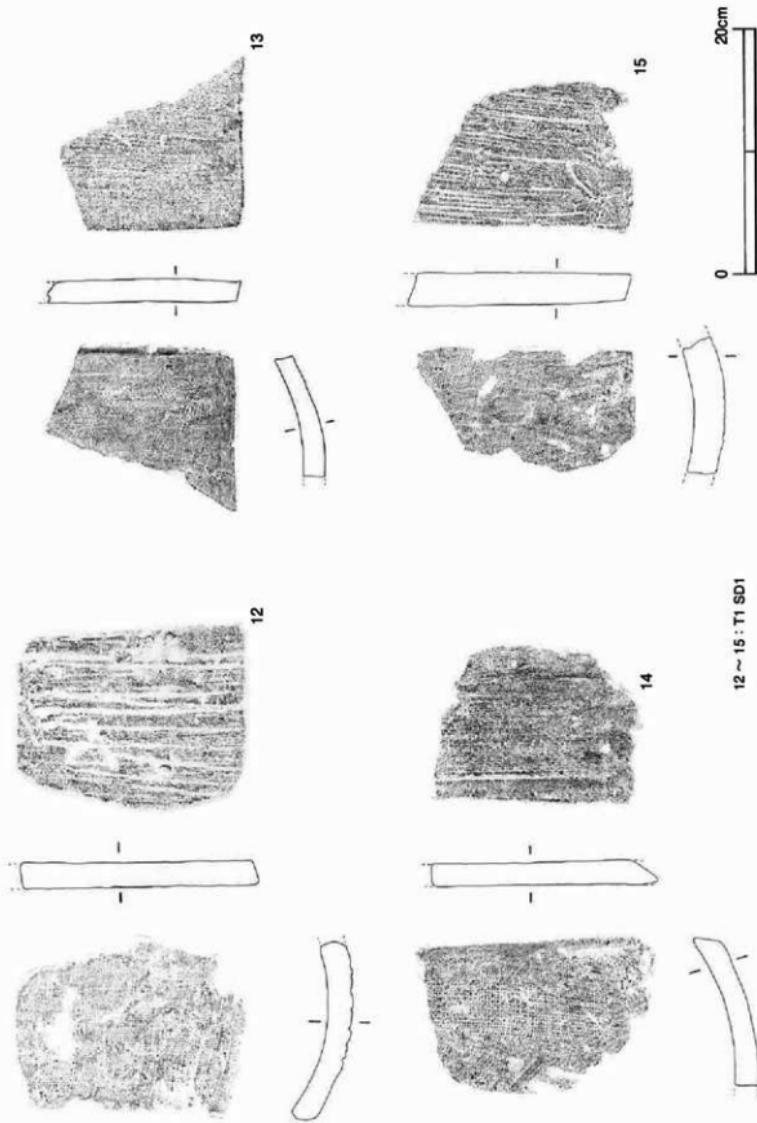
第19図 出土遺物(平瓦1)

第20図 出土遺物(平瓦2)

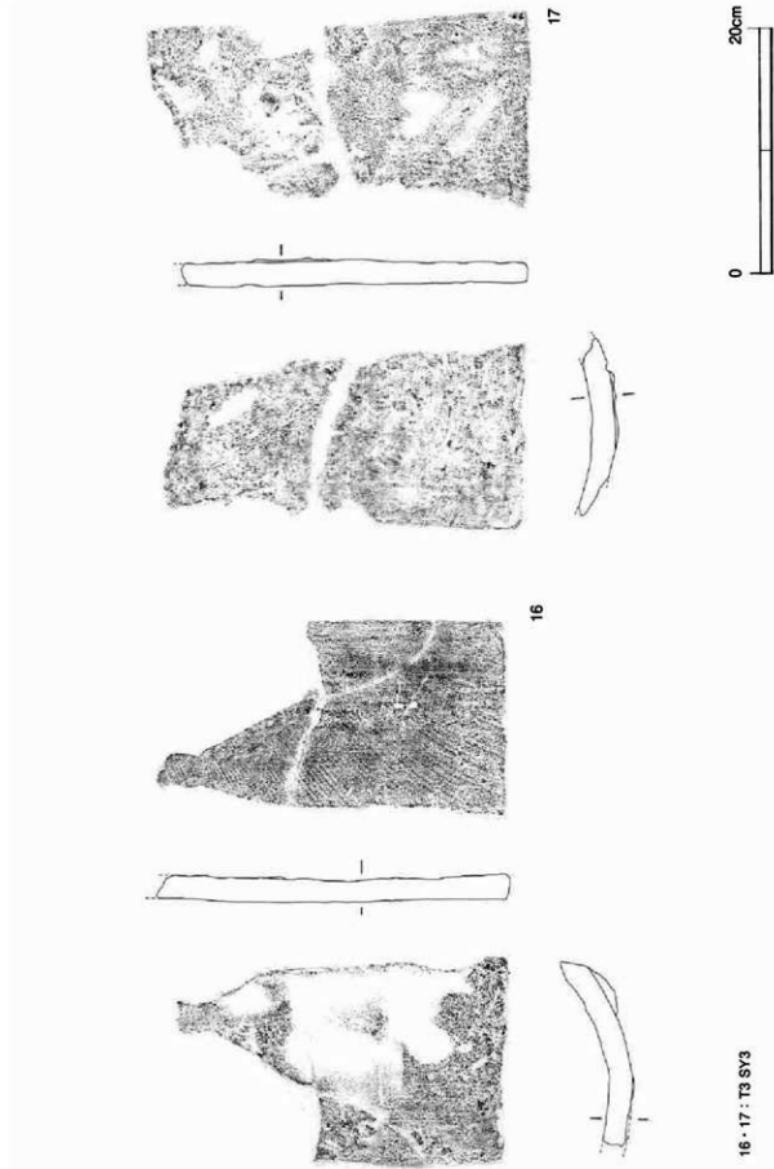


9 : T1 黄褐色土 10・11 : T1 SP1

第21図 出土遺物(平瓦3)



第22図 出土遺物(平五4)

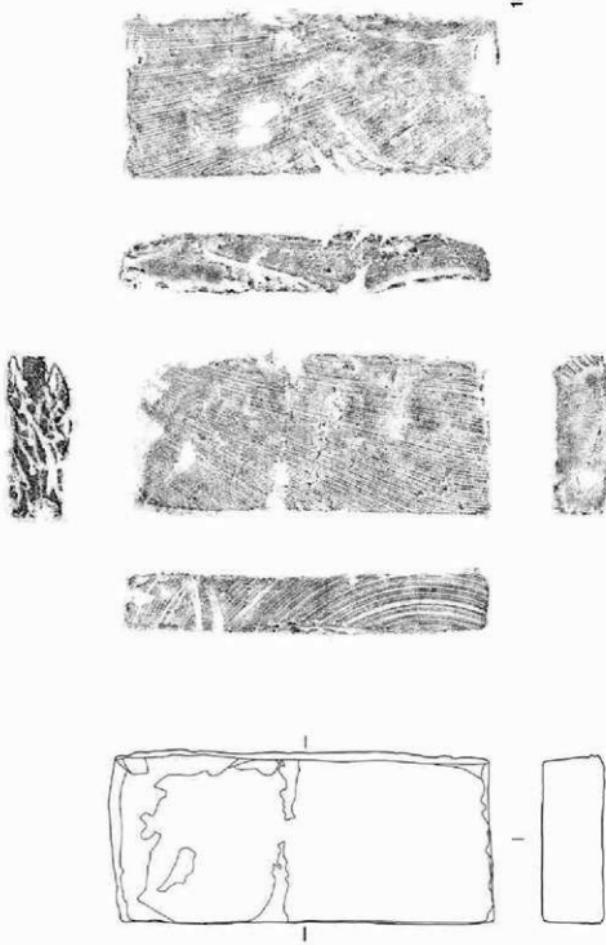


16・17:T3 SY3

第23图 出土遗物(堆)



18



18 : T1 Sd1

図版 1 垂水遺跡 1



調査トレンチ近景(南から)



調査トレンチ(西から)

図版2 垂水遺跡2



出土遺物①



出土遺物②



調査トレンチ近景(東から)



調査トレンチ北壁断面(南から)



紫金山公園遠景



調査地近景



T 1 全景(東から)



T 1 全景(西から)



T 1 SD 1



T 1 (北壁断面)



T 1 土層断面(東側)



T 1 土層断面(西側)



T 2 全景 (東から)

T 2 全景 (西から)

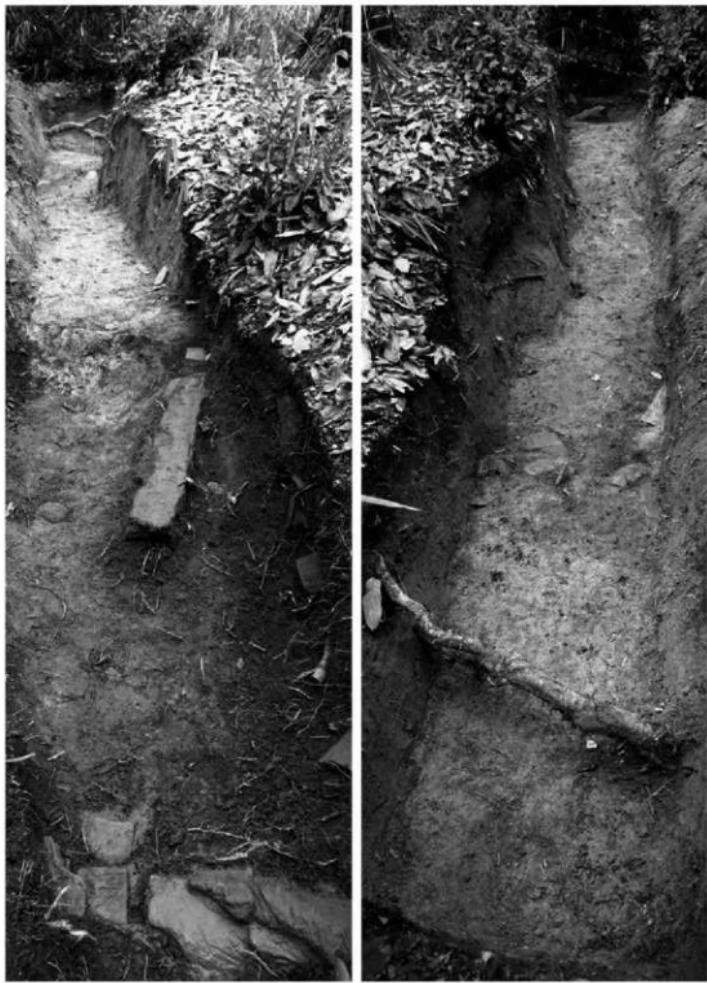


T 2 土層断面 (東側)



T 2 土層断面 (西側)

図版 10 吉志部瓦窯跡 7



T 3 全景 (東から)

T 3 全景 (西から)



T 3 SY 3 (南から)



T 3 SY 3 (北壁断面)



T 3 S X 4 (南から)



T 3 S X 4 (北壁断面)



T 3 土層断面(東側)



T 3 土層断面(西側)



S Y 3 の検出



トレンチの掘削



S D 1 の検出



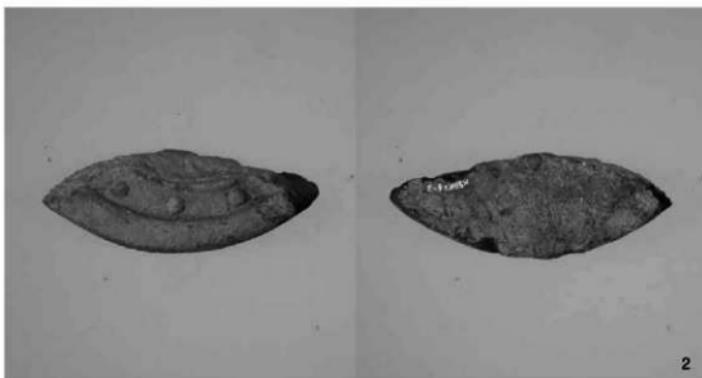
S Y 3 の写真撮影



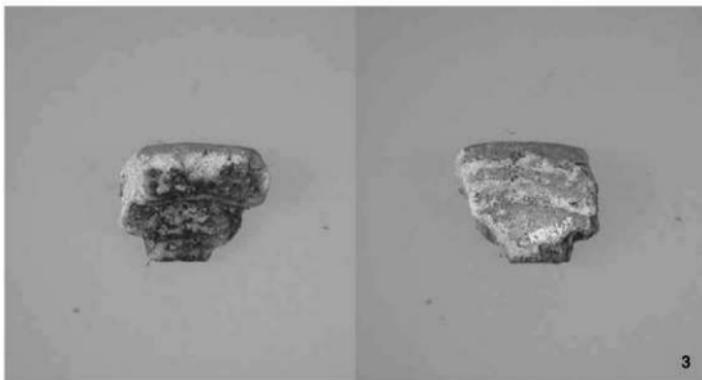
S Y 3 の実測



1



2



3

1・2: T1 SD1 3: T3 出土不明

図版 16 吉志部瓦窯跡 13



4



5

4・5: T1 SD1

図版
17

吉志部瓦窯跡
14



6



19

6 : T1 SD 1 19 : T3 SX4



7



8

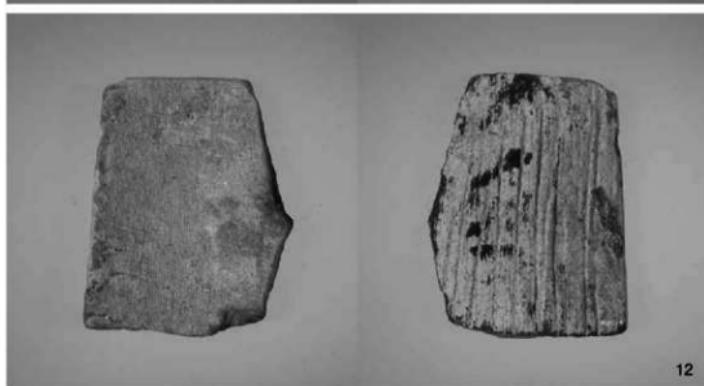
7: T1 黄褐色土 8: T3 SY3

図版 19

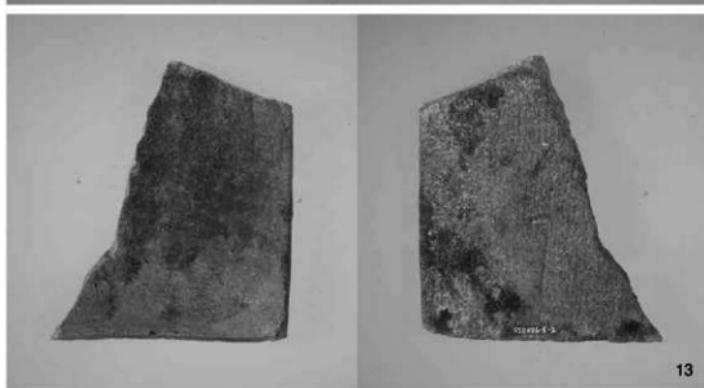
吉志部瓦窯跡 16



9



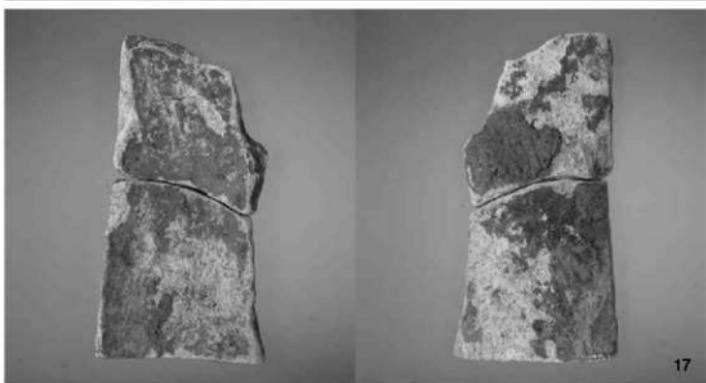
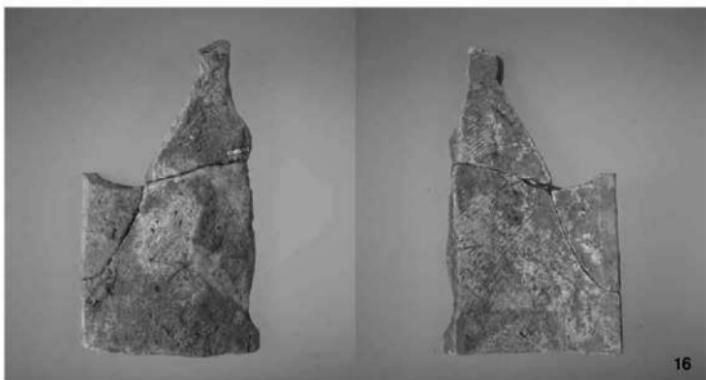
12



13

9 : T1 黄褐色土 12・13 : T1 SD1

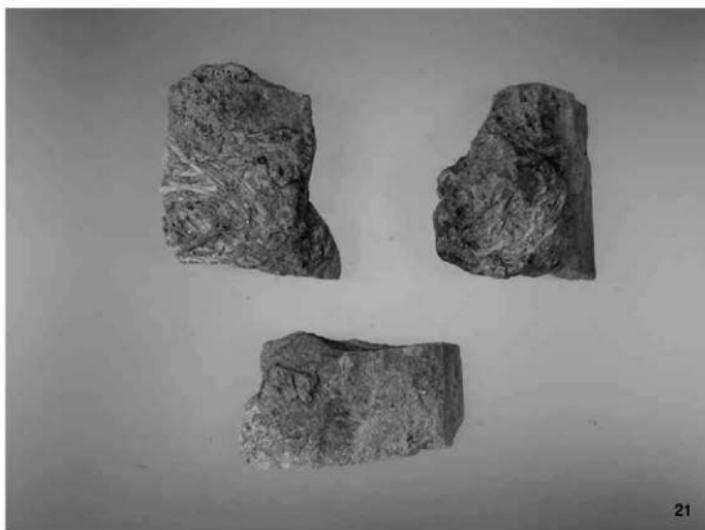
図版 20 吉志部瓦窯跡 17



15 : T1 SD1 16・17 : T3 SY3



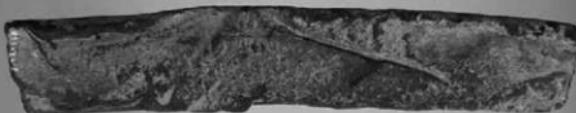
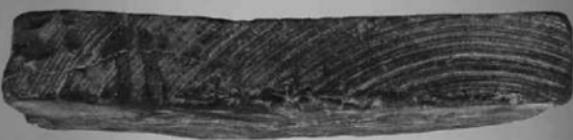
20



21

20 : T1 SD1 21 : T3 表土～淡黄色粘土

18



18 : T1 SD1

報告書抄録

ふりがな	へいせい29(2017)ねんどまいぞうぶんかざいきんきゅうはくつちょうさかいほう
書名	平成29(2017)年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報
副書名	垂水遺跡 高城B遺跡 吉志部瓦窯跡
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	坂口健二・田中光徳・賀納章雄
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0027 大阪府吹田市朝日町3番 TEL(06)6155-8063
発行年月日	西暦 2018年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 °°°'	東 綏 °°°'	発掘期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
垂水遺跡	吹田市垂水町1-749-2, 21	27205	86	34° 46' 05"	135° 30' 16"	20170530	5	確認調査
高城B遺跡	吹田市高城町1362-3	27205	117	34° 45' 36"	135° 31' 44"	20170904	2	確認調査
吉志部瓦窯跡	吹田市岸部北4-106-1	27205	38	34° 47' 02"	135° 31' 53"	20180111- 20180125	27.3	現状確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
垂水遺跡	集落遺跡	弥生・古墳	なし	弥生土器、土師器、須恵器	なし
高城B遺跡	集落遺跡	古墳・平安・中世	なし	土師器	なし
吉志部瓦窯跡	生産遺跡	平安	窯跡、溝	瓦、土師器、陶器	なし

平成29(2017)年度
埋蔵文化財緊急発掘調査概報

垂 水 遺 跡
高 城 B 遺 跡
吉 志 部 瓦 窯 跡

平成30(2018)年3月30日
編集 吹田市朝日町3番
発行 吹田市教育委員会

この報告書は300部作成し、一部当たりの単価は479円です。